

知的障害特別支援学級に在籍する生徒が、交流及び共同学習において得意なことが認められることによって少しずつ意欲的に学習に取り組むようになった事例

1. 事例の概要

知的障害特別支援学級に在籍する中学2年生のA生徒が、通常の学級における交流及び共同学習を進めていった事例である。

A生徒は、国語、数学以外の教科については、通常の学級において交流及び共同学習を進めているが、学習の理解度や稚拙な言動により学習参加に難しさがあった。そこで、板書の書き写しやノート作りなど得意なことを評価するとともに、座席の位置やグループ編成についての配慮、「連絡ファイル」による担任と合理的配慮協力員との情報共有、A生徒へのこまめな声掛けなどにより少しずつ自信をつけさせ学習に意欲的に取り組むことができるようになった。

キーワード 知的障害、交流及び共同学習、グループ編成、座席の位置

2. 生徒の実態

A生徒は、B市立C中学校の知的障害特別支援学級に在籍する中学2年生である。小学5年生から知的障害特別支援学級に在籍している。身辺処理は自立しているが、周囲の人との関わりも少なく社会性が乏しい。学力は、小学校中学年程度であり、発達検査によれば、全体的に平均を下回っているため、学習内容を習得させる上でモールステップとフィードバックを繰り返す支援が必要である。

A生徒は、保護者の願いもあり、国語と数学以外の教科については、通常の学級において交流及び共同学習を進めている。板書もきれいに書き写すことができるため、学習内容を理解しているように見えるが、一度聞いたことも忘れていくことが多く、学習内容の定着が難しい。

3. 本事例に関する基礎的環境整備

- C中学校のあるB市は、中学校ブロックごとに11の地域に分かれており、9名の担当指導主事と9名の教育相談員が分担して各地域を担当している。この11地域ごとに就学支援委員会を開催するとともに、判断が困難なケースについては参集範囲を全市に拡大した就学支援委員会を開催し、児童生徒の適正就学について判断している。【基礎1】
- B市では特別支援教育に精通している大学教授をアドバイザーとして招いて巡回相談を行っており、児童生徒の実態把握と具体的な支援について指導・助言を受けている。【基礎2】
- B市では、年度始めと年度末の2回、市内全小・中学校の特別支援教育コーディネーターを集めて連絡会を行い、個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成例を示している。【基礎3】
- B市の特別支援学級では、在籍児童生徒の障害や集団適応の程度に応じて教育課程を編成し、他の児童生徒と交流する時間を確保しながら、個に応じた指導ができるように工夫している。【基礎7】

- C 中学校では、特別支援学級に在籍する生徒が希望する進路を実現するために、生徒一人一人の実態に応じて必要な交流及び共同学習を行っている。【基礎8】

4. 合意形成のプロセス

A 生徒が小学5年生になるときに、通常の学級から知的障害特別支援学級への在籍変更が検討され、保護者とも合意した。また、中学校進学の時にも、特別支援学級へ在籍することについて合意したものの、将来は高等学校に進学させたいという保護者の思いがあり、交流及び共同学習の希望も出された。

A 生徒自身は進路について自分で判断することは難しく、保護者の希望がそのまま A 生徒の希望になっている状況であったが、中学校2年生になってからは、本人、保護者ともに高等学校以外の進路についても視野が広がっており、より適切な選択ができるよう相談を継続している。

5. 合理的配慮の実際

- A 生徒は、座席の位置や周囲の生徒の座席によって学習意欲が全く異なるので、その時々の実態に応じて課題が改善できるように、特別支援学級担任や各教科担任、合理的配慮協力員が相談して座席の配置を決めている。【合理①-1-1】
- 理科では、4人グループを編成することが多かったが、コミュニケーションの苦手な A 生徒は実験が始まると見ているだけであった。そこで、学習内容が分かり、満足感を得ることを第一に考え、もう一名の特別支援学級在籍生徒と2人でグループを編成し、合理的配慮協力員が支援しながら実験してみたところ、主体的に参加できるようになり、理科が楽しいと言えるまでになった。【合理①-1-1】
- 英語の学習について、入学当初から、学習内容の理解に不安があり、本人からも「分からない」という訴えがあった。そこで、まずは、これまでの家庭学習の在り方を見直し、スモールステップで内容が理解できるようにした。その結果、授業において場面設定や会話のパターンがある程度決まっているコミュニケーション活動では、自分から話し掛けて会話をすることができるようになってきている。【合理①-1-2】
- 理科の学習において、実験の結果を撮影し、カラー印刷してノートに貼った。観察記録が残ったことで学習内容に興味をもつことができた。【合理①-2-1】
- 「連絡ファイル」を作成することによって、担任と合理的配慮協力員が A 生徒に関する情報を共有するとともに、合理的配慮協力員がこまめに声をかけたりして、どの教科においても必要な配慮が提供されるようにしている。【合理②-2】

6. 本事例の成果と課題

A 生徒は、学習内容の理解に時間がかかったり周囲の生徒と上手にコミュニケーションを図ることができなかつたりして、自分にはできないと諦めていたことがたくさんあった。教科学習の調整や変更、頑張りを認める教科担任の声掛け、教員間の情報共有などによって、分かることが増えていき、少しずつ自信をつけ学習に意欲的に取り組むことができるようになってきた。

今後も継続して通常の学級の中に居場所を作り、学習意欲を保持していくことで、学習効果が期待できるとともに、周囲の生徒との関わりが広がると考える。